

安藤野雁考・補（その七）

——その著『万葉集新考』研究の基礎としての伝記——

遠藤宏

本稿は、駿河国富士郡大宮の佐野定経（角田桜岳）の日記及び角田家の所蔵に係る文書類を通して安藤野雁の動向を探った、本誌前号及び前々号に掲載された拙稿^①を引き継ぐものである。従って、使用する定経の日記（「角田桜岳日記」）の底本についてや、佐野定経の呼称を使用する理由その他、引き継ぐ事柄は前稿、前々稿と同じである。

前稿においては、定経が江戸に出た嘉永七年（一八五四）四月（十二月に安政と改元）以後の日記を対象とした。ただそこでは、野雁周辺の人物（信夫顕古嘯山・津田真道・柴田収蔵・佐藤氏之助方定）についての叙述が大部分を占めることになってしまい、野雁の行動を中心とする条文については、紙幅の都合上、最初に野雁の名が現われる一条のみを採り上げるにとどまった。そこで本稿においては、前稿に記載した以後の野雁を主として記す予定であった。ところが、前稿を収載した本誌前号の発刊後に未見の「桜岳日記」^②に接することになった。そこには、野雁のみならず野雁周辺の人物達（前稿記載の人達も含む）の名も多く見出すことができる。従って、前稿の補訂を行う必要が生じて来たので、先ずその補訂から

行っていくことにしたい。

嘉永二年（一八四九）十月十八日に大宮の自宅を出て江戸に向い、二か月の江戸滞在後、十二月二十五日に帰宅した。^③十月以前の定経は江戸に出ようとしてなかなか実行できないでいた。このあたりのことは前々稿（注1②拙稿）において述べた。ようやく実行に移されたのである。このことは私にとっては初見であり、前稿（注1①拙稿）及び前々稿においては、臆測を交えた推測を多少述べたが、「東行記」が確証を示してくれた。

この年の野雁は、九月に大宮から岩淵に移っている（注1①拙稿）ので、この日記には現れない。津田真道・信夫顕古・柴田収蔵らの名も見られない。嘉永二年の時点では彼等が定経の枠内に入る条件は未だ整っていないはずである。その他には、塙次郎忠宝と山崎知雄武陵の名が見られる。

塙忠宝と野雁との関わりについては以前から多々あるのだが、この後にも野雁・定経と絡んでくる（後述）。「東行記」に見られる記事は次の二条である。

○金銭出納簿 嘉永二年十二月十五日

一金式分式朱ト式百六拾八文 塙先生^三 蚩蠅鍊御駒代

○日記 嘉永二年十二月十五日

：塙へ行、二郎様懇意^三 咄ス、古物咄いろく

○安政二年八月八日

一五拾文 塙二男来候節菓子代

この条文の二男は二郎の誤記かもしれないが、呼び捨てではないか。二男が正確であったとしても、忠宝側から定経の宿に足を運ぶというのとは何か格別の理由によるのかもしれない。菓子が供されてもいる。但し用向き不明。

前二条は同日のことになる。「蚩蠅」は、塙保己一が編んだ『蚩蠅抄』(全六卷)のことであろう。「鍊御駒」は全く不明(共に『国書総目録』に不載)。「蚩蠅抄」は、開化天皇から後小松天皇応永年間迄の間の「夷賊来寇之事」を諸書から抄出したもので嘉永三年刊板下は忠宝直筆⁵。定経は時勢に適った興味を示している。情報収集能力(或いは臭覚)はなかなかのものであろう。なお、「式分式朱」は「蚩蠅抄」の代価、「式百六拾八文」は「鍊御駒」の代価である。

なお、定経が塙塾に出入りすることができたのは、或いは野雁を介してのことであったかもしれない。また、前稿で採り上げた範囲においても塙塾のことは記されているが、大体は野雁が関わっている。統稿において述べることにしたい。

山崎知雄については、『天理本野雁集』に、「山崎知雄が校訂日本紀略のふみなりての竟宴に」という詞書の下に一首掲げられている⁽⁶⁾。当然、塙塾を介しての關係なのだが、定経も多少絡んでいるのかもしれない。

(1)金銭出納簿 嘉永二年十二月二十日

手習ひ屋通、山崎武陵来る

「武陵」は知雄の号。「東行記」には右一条のみだが、以後にも記されているので、ここにまとめて記しておく。

(2)嘉永七年(安政元年) 五月十四日

ひる前山崎武陵子来る、日本紀略同人参考此度開板相成候を進物^ニ持来り長話して帰る

(3)嘉永七年(安政元年) 七月八日

一暮後山崎武陵子来候、古学の儀其外何くれ咄し、五ッ過帰候

(4)嘉永七年(安政元年) 十二月二十九日

一金式分也 大伝馬町裏通山崎武陵子へ本代、□□惠遣ス

(5)安政二年八月十日

一金式分也 右同人

右^者巻物、掛物其外頼もの代之内へ手金として遣候也、^{使嘉平}

亞西亞図巻物一 仏画三幅仕立三

武陵書初掛 一 宝永之記箱代等

之手へ遣し置候也

『日本紀略』校訂の仕事は和学講談所の業務に武陵が入り込んだ

ものであり、嘉永三年に成り、その後同所から刊行された。⁽⁸⁾ 嘉永七年の時点で、「此度開板相成」というのは少し間が空き過ぎていゝる感があるが、了とすべきか。それを手土産として定経の所に持参した。式分はその代価の積りであろう。(5)には武陵の書が購われている。それだけの筆であつたのであろう。

武陵が定経の宿を訪れるようになったきっかけは不明だが、やはり野雁を介してのことではなかつたかと思つてしまふ。但し、右掲の条文には野雁の名は出て来ない。野雁と武陵の仲はさほど密ではなかつたようでもあるので、野雁は関つていないのかもしれない。

定経は、嘉永五年(一八五二)、六年、そして七年三月に短期間だが伊豆を廻つてゐる。⁽⁹⁾ その範囲には、代官所のある韭山も含まれてゐる。江戸に行く目的と大いに関わつてゐるらしい。その韭山在の人の中に、「大石先生」という人物が見られる。

(1) 嘉永六年十月五日

一金沓分也 花洒香式斤

右者 甲州屋二男山口氏逸平との、韭山大石先生、竹屋若亭主、山木むら彦次右衛門との等へ遣候分 消石書付入用

(2) 嘉永六年十月八日

昼後り大石先生方へ行何くれ咄ス、吾門入之験を致ス(中略)
且大石氏分南^レ総詩藁をもらふ

(3) 嘉永六年十月八日

一金沓分也 大石先生へ門入之謝儀

(4) 嘉永七年四月十二日

大石先生ニ逢ふ

(5) 嘉永七年四月十五日

一金式朱也 大石氏^{江年}始之分遣ス

(6) 嘉永七年四月二十九日

御台所ニ罷在候石井某ニ大石先生分の書状と、ける

この大石先生は大石千秋のことであろう。野雁は、その著『旅路の草の葉』に

伊豆の国韭山にいたりて大石の千秋にはしめて逢たる時

と前書きして詠歌を掲げている。⁽¹⁰⁾ この年次は明確ではないが、右掲個所の前年から推測すると、嘉永二年のことではないかと思われる。

この年、野雁は駿河国(大宮、岩淵など)に滞留している(前々稿、注1(6)拙稿など)。右掲の条文によれば定経も大石千秋とは初対面ではないらしいが、野雁と絡むところは見受けられない。「南^レ総詩藁」(総南詩藁)と定経は記しているが、これは「総南詩稿」の誤記ではないかと思われる。⁽¹¹⁾ この書は漢詩集で、著者が南総州に住していた時の作をまとめたものであり、著者名は大石大年、号公潤、別号梅識。刊年は弘化四年(一八四七)らしい(注11参照)。大年と大石千秋との関係は明確ではない。大年は長年住んでいた総州南部から江戸向島寺島村(現向島四丁目)に居を移し家塾を開いた(題言。菊地中正作)。甲辰年(弘化元年)の総南での作が収められ

ているので、江戸移住は刊年に近い年だったのであろう。生没年未詳。一方、千秋は伊豆菲山在。明治元年没、五十八歳（『国学者伝記集成』）だから嘉永六年（一八五三）当時は四十三歳。千秋の号が梅嶺で大年の梅識と近似する。千秋は大年の子（養子）ではなからうか。そうであれば、父の近刊を定経に与えたということになるう。

大石千秋に関しては、『国学者伝記集成』の短かな文しか得られていなかったのだが、定経の日記によって僅かではあるが、貴重な情報を加えることができた。

右掲の(6)は、出府した定経が何はさて置き、本所の菲山代官役所出先きに挨拶に出向いた際の記事である。この日の記事には、「御伝馬一条」や「硝石の事」などが記されている（揭示は省略した）。「豆行記」にもこの二項は複数回記されていて、定経の江戸行きの主目的がほぼ明らかである（前稿においては、硝石絡みの行動の理由は不明と記した）。

なお、「豆行記」には、「一金式分也 津田様遣ひ」（嘉永七年三月八日条）、「二百文 荒の角代此分菲山_二罷在候津田様へ遣すつもり」（同年三月十一日条）などのように、津田の名が見出せる。この人物は津田真道のことではないかと疑われもするが、そうではなく、「支配江戸元締津田橋六殿」（安政二年五月六日条）のことと思われる。真道は、嘉永六年に既に開田（皆伝）太郎（真一郎）と改名しているし、定経の日記においては、真道のことは一貫して皆伝で通している。またさらに、真道が菲山に勤務していたという証

しも認め難い。

定経は、嘉永七年四月（詳細は後記）江戸に出た。その時のことを前稿で採り上げたのだが、それは五月十七日以後の分であった。今回採り上げるのは、五月十七日以前の分である。

四月十日に定経は大宮を出て沼津から菲山に入り、そこで代官役所との最終（恐らく）の詰めを行って、十三日、「吾出府と決着ス、昼後書面出ス」（「豆行記」となる。十五日三島、十八日に江戸着、浅草笠倉屋泊、二十二日「昼ヨリ馬喰町二丁目伊勢屋嘉兵衛方_エ引移ル」（「東行記」ということになった。前稿では、定経の江戸での滞留先についてあれこれ詮索したが、結果は間違っていないことが全くの無駄であった。

以後、前稿の欠を補訂する必要のある条文を追っていくが、野雁周辺の人々の分について先ず採り上げていく。なお、関連する条文は前稿においてはほとんど揭示しなかった。必要な記事が多量だったからである。ここでは極力全条文を掲げることにする。

津田真道

(1) 嘉永七年（安政元年）八月二十九日

廿七日皆伝太郎三河□□杯_二め

(2) 安政二年四月六日

一金三朱也 江戸町壱丁め大口皆伝、新発田三人之節□□半分

(3) 安政二年四月十九日

一金壹分也 魚屋徳二郎□

先日皆伝氏来候節□□

(4) 安政二年五月十一日

今日皆伝氏来り書画会ニ不行 高原分香の物を贈ル

(5) 安政二年五月二十四日

シバタ、皆伝来るか

(6) 安政二年五月三十日

夜皆伝・原田・高原来ル

一式百文 皆伝子来る、又伊東塾備中原田圭兵衛来る、右之節

野田屋^二酒代

(7) 安政二年六月十五日

一四拾八文 ろうそく式丁代 今宵皆伝子来泊

(8) 安政二年七月二十八日

一金壹両也 皆伝氏へコールド翻訳料ノ内へ渡ス

(9) 嘉永七年(月日不明)

一金壹両 信

一金貳分 安

一金壹両 越後

一金壹両 新発

一金壹両 開伝

(中略)

メ金拾四両貳朱也

定経は、真道が来たので外出を中止したり、宿泊させたりと、前

稿において見受けられたのと同じ様な密な関係が二人の間には何わ

れる。(4)の「香の物を贈ル」は「香の物を贈らル」のことか。(8)の

コールドは不明。外国語は真道の分野。翻訳した分量がどのくらい

かは不明だが、壹両とは高額の範囲に入るのであろう。(9)の開伝の分

の壹両はこの翻訳料に該当すると思われる。なお、(9)の信は信夫、

安は安藤、新発は新発田の略記と考えてよからう。野雁が受け取っ

た式分は他の三人に比して少額だが、仕事の質の差であろう。

日記の他の個所には翻訳書を購入する記事も見られるのだが、そ

れにとどまらず、翻訳させるところまでの積極性を見せている。定

経の興味の範囲は限度が無いほど広い(その一端は前稿においても

示した)。

信夫嘯山

(1) 嘉永七年八月三十日

一金壹分也 信夫嘯山子へ環海異聞筆工紙代渡ス

(2) 安政元年(嘉永七年)十二月三十日

一金壹両也 萬之原檢校内 信夫嘯山子へ写本いろく之代

(3) 安政二年四月二十七日

一金貳朱也 仲道絵図入用ノ内、信夫氏・大久保行入用□□

(4) 安政二年五月一日

一金壹朱也 仲道絵図入用 信夫子へ渡、二日ハアシノヤ□直^三

天台へ行候積故□□

- (5) 安政二年五月四日
一金式朱也 仲道図入用信夫氏へ 同村郡圈印紙代等
- (6) 安政二年五月五日
出金壹朱也 信夫氏下駄代
- (7) 安政二年五月七日
今日信夫氏来り絵図をしらふる、野雁子と仲道書ニかゝる
一金壹朱也 信夫氏へ遣ス仲道絵図入用也
- (8) 安政二年五月十八日
一金式朱ト三百三拾文 両国米沢町深川亭酒食分、新発田・野雁・信夫子等と
- (9) 安政二年五月二十日
一金壹分也 信夫氏へ仲道図等之事ニ付渡ス
- (10) 安政二年五月二十五日
一金壹両也 信夫嘯山子へ遣ス 同人此度御船前江分居いたし候ニ付此迄写本等いたし候料之内へ惠ミ
- (11) 安政二年五月二十六日
今日信夫氏分居春日手伝行
- (12) 安政二年五月二十七日
夕春吉同道深川行、信夫氏宅工寄
- (13) 安政二年六月一日
昼ヨリシノブ子・シバタ
- (14) 安政二年八月九日
一五拾文 野雁子・信夫子等来り鍵屋之伝を書候節菓子代

- (15) 安政二年八月十二日
一金壹両也 信夫嘯山老へ遣ス、仲道絵図并筆工料等也
- (16) 安政二年八月十三日
一金式朱也 長谷川鯉溪子へ遣分、信夫氏へ頼む
- 以上、前稿においては大量なので割愛した条文の揭示を行つてみた。前稿と比較して全く新しいというような事柄は少い。(2)の葛ノ屋檢校のところに入り込んでいるらしい点は初見だが、定経のために写本を行つてゐること、地球儀に関わることで働いてゐることなど。仲道絵図といふのはよくわからないが、地球儀用の絵図面のことであろうか。嘯山が御舟藏前に居住してゐることは前稿で採り上げた日記によつてもわかつていたことだが、(10)によつて、隠居して分居したということが判明したことになる。また、嘯山と野雁と芦ノ屋の關係については野雁著『せき山』を通してわかつてゐる(前稿)のだが、(4)によつても裏付けられる。
- 新発田収蔵
- (1) 嘉永七年五月十一日
一夕方佐土新発田某著述万国地名捷覚を見る
- (2) 安政元年(嘉永七年)十二月三十日
一金式分也 三州屋^{二面}新発田兩人入用
- (3) 嘉永七年(安政元年)(月日不記)
一金壹両 新発

- (4) 安政二年四月六日
一金三朱也 江戸町菘丁め大口皆伝・新発田三人之節□□半分
- (5) 安政二年四月七日
一金壹両也 成田屋へ払、二月下旬新発田兩人行節之分
- (6) 安政二年四月十四日
一金三朱也 今戸□屋^{三前}松浦竹四郎・新発田三人酒食代
- (7) 安政二年五月十二日
一金式朱ト百文 新発田収蔵子と天王町一力亭^{二前}酒食夕方也
- (8) 安政二年五月十三日
昨夜桜楼へ新発田兩人泊す
- (9) 安政二年五月十八日
一金式朱ト三百三拾文 両国米沢町深川亭酒食分、新発田・野雁・信夫子等と
- (10) 安政二年五月二十四日
シバタ、皆伝来るか
- (11) 安政二年六月一日
昼ヨリシノブ子・シバタ
- (12) 安政二年六月二日
一金壹朱也 新発田収蔵子来
- (13) 安政二年七月二十八日
一金式朱也 池の端仲町^{二前}新発田兩人酒食代
一金壹分也 大和楼入用分 内金壹朱也 新発田分
- (14) 安政二年八月二日

一金式分也 七月十三日新発田・徳三郎同道丸熊之分田中屋へ相渡候
入金式朱也 新発田分入

ほとんどの場合、飲食費関係で、定経が支払っているが、(4)では収蔵は恐らく自分の分を定経に渡している。ここで重要なのは(1)であろう。前稿においては収蔵が登場するのは安政二年二月以後と記したが、(1)(2)(3)はそれ以前になる。そして(1)の条文は、定経は収蔵本人を未だ知っていない。この時点で収蔵の著書を通して、地球儀作製に利するところ大であると判断したのであろう。そして何らかのつてによつて収蔵と接触したのであろう。その後は彼から多くの助力を得ている(前稿)。

また(9)では、野雁とも会食している。前稿においては、両者の絡み合いは定経の日記によつては明白ではないと記したが、訂正が必要である。なお、「井出様内柴田氏へ遣ひ候菓子代」(安政二年七月二十日)という記事があるが、柴田という表記や井出様内という叙述によれば収蔵とは別人と思われる。

佐藤民之助

この人が定経側の資料に出てくるのは極めて少いこと、前稿においても記した。今回の分においては一個所に見られる。

○安政二年八月十二日
一金式朱也 塩町春梅屋九兵衛殿佐藤民之助先生へ遣ひもの半

切代

佐藤民之助方定は医師として成功していたようであり、定経のところで長話しや酒食に時間を費している暇は無かったのであろう。しかし、付き合いはしっかりと有り、定経からの挨拶がちゃんとなされている。

以上の外にもう一人、前稿で対象とした日記の範囲内のだが、採り上げておく。

黒川春村

春村は『碩鼠漫筆』『金石銘文鈔』などの著者として知られているが、彼の名が野雁の著に見られる。『万葉集新考二十六』の、「阿胡之海」(万葉集卷一三・三二四三)の注釈に「黒河氏村云々凡て国々の阿胡奈胡多胡などは皆和の意にて海の和やかなる処の名なり」と記している。定経の日記には次の五箇所に見える。

(1) 元治元年(一八六四)六月二十三日

一金壹分也 黒川春村先生へ

右ハ吉沢翁伝校合頼、其外相談ノ事アリテ遣ヌ

(2) 元治元年六月二十四日

今八ツ頃ヨリ向両国大徳院地面春村先生へ行何クレ咄シ(略)

(3) 元治元年七月十六日

七ツ頃ヨリ春村主方へ行(略)

(4) 元治元年七月十七日

春村主来ル、九ツ過歸る

(5) 元治元年七月十八日

黒川春村主来リ候故昼食出ス

吉沢翁の伝記作成に定経が関わっていることは他の箇所にも見られる。定経と春村との関係はこの伝記についての事に限定されるのであろう。一か月未満で終わっている。春村は塙忠宝や山崎知雄とも交渉を持っていたらしいので、野雁や定経が加わっても不思議はない。ただ、定経の日記の中では野雁と春村は交ってはいない。『万葉集新考』内の野雁の言が春村からの口述によるのか或いは著書からの引用なのかも判然としない。春村の著した『碩鼠漫筆』に「阿胡の海の弁」という項目があつて、万葉集中の「阿児」「奈呉」「多古」等の用例を拾って、「和の義」と述べている。野雁の言に間違いはない。『碩鼠漫筆』の序文は安政六年六月になつている。このころの野雁の居処がどこであつたかはつきりはわからない。この年、武州大國魂神社の猿渡盛章七十賀に賛歌を詠んでいる(『類題新竹集』)ので、江戸在住であつたのではないかと推測される。少くとも、大宮に居た定経の日記には野雁は現われない。江戸住まいなら『碩鼠漫筆』を購入することはできたであろう。がしかし、恐らく購える経済的余裕は無かつたであろう。『碩鼠漫筆』は、春村が書きためていた小文をまとめた(序文)ということなので、野雁は口頭で聞いたのではなからうか。あるいは、塙の塾で見たのかもしれないが、こういう可能性はいくらでも推測できる。

以上で、定経の日記を通しての、野雁に関わった人々についての前稿・前々稿の補訂を述べ終った。そこで、次には野雁に直接関わることを述べなければならぬのだが、情報はかなり多量になるので、紙幅が十分でなく、またもや続稿に送らざるを得ないことになった。そこで、以下の余白を使って、定経の日記に見られる、野雁とは直接関わらなかつたかも知れない人について触れておきたい。その人々の範囲は、野雁側の資料には見出せない人であること、書画骨董の作者ではないこと、定経が手にした書物の著者ではないこと、等に限定し、私の主観的な選択も加わっている。(採り上げる順は不同)。

○草鹿砥宣隆

三河国宝飯郡の神官で、『旋頭歌四体』『万葉集序歌抄』などの著者。定経の日記には次掲のように見られる。

(1) 嘉永七年六月二十一日

山城屋弥市ミセ^ニ府中四郎兵衛との・三州草鹿戸近江とのなと、長話して、暮方宿^江帰る

(2) 嘉永七年七月九日

(山城屋の)ミセ先^ニ参州草鹿門某と咄し、四ッ過宿へ帰り
(略)

(3) 嘉永七年七月十一日

一三拾式文 上葛代 三州草鹿戸氏来候節

定経は宣隆とは出先きの山城屋で偶々出会ったのではないだろう。宣隆が三河国から出府して来た理由は不明。宣隆も定経の宿を訪れていて、極めて短かいわずか数日の交渉だが密な交わりである。宣隆と野雁との直接の交渉は確認されないが、宣隆は八木美穂や羽田野敬雄とも関わっていたようであり、野雁は美穂・敬雄と接している⁽¹⁶⁾ので、間接的には関わっていることになる。

○緑亭川柳

五代目川柳。安政五年八月に七十二歳で没したとのことなので、晩年のことになる。

(1) 嘉永七年九月八日

うら河岸さかみやふふね^ニつくたへ行、上総屋某を尋ぬ。是川柳亭也、(中略)川柳と何くれ咄す
一金式朱也 佃川柳亭老人へ土産料

定経は、同年五月に『川柳百卅八篇』一冊を六十四文で購入している。これがきっかけになったのかもしれない⁽¹⁷⁾。『柳多留』百三十八篇は四代川柳眠亭賤丸の編になる。定経の興味の幅の広さが鮮かに見られる一齣である。幅の広さで言えば、もう一人挙げられる。

○中浜万次郎

言わずと知れたジョン万次郎である。万次郎は、嘉永六年に葦山代官手付となっている。

(1) 嘉永七年五月七日

(浅草大代地庄八(号、百枝)から) 中浜万次郎殿方へ度々参
候由承る

(2) 嘉永七年五月二十二日

(百枝方で、あめりかの) 書たためものをかり、中浜万次郎書面
をもらふ

(3) 嘉永七年六月二十一日

(山城屋忠兵衛と) 近日中浜万次郎殿同道、一夜船^ニ而咄し度な
と申合せ候

(4) 嘉永七年七月一日

(山城屋は) 今宵花火見^ニ中浜万次郎をつれ百枝子宅迄来候積
之段申

(山城屋・定経の船と) 四ッ過中浜万次郎殿・百枝・山忠など
の船^ニ行逢ふ、吾右のふね^ニ乗うつり大^ニ興ス、(中略) 中浜氏
ハ一ッめ橋分あかる。

(5) 安政六年(一八五九)十一月二十九日

範之進中浜の漂流^(氣)を見る

(6) 元治元年(一八六四)六月十四日

昼前今山城屋忠兵衛・中浜万次郎・大和屋源三郎来ル、酒吞

(7) 元治元年六月二十六日

今朝中浜万次郎来ル

(8) 元治元年八月十九日

今朝神仙坐中浜万次郎子来暫話帰

漂流記ものも含め外国種の事・人物には殊の外興味を示して
いた定経が、葦山代官手付という願つてもないところに来た中浜万次
郎の懐の中に入り込もうとし、遂には定経の宿まで来させる迄に
なっている。なお、万次郎は(5)の時には葦山代官手付から既に離れ
ている。

更に定経は、(6)直前の(元治元年五月三日に横浜のアメリカ
「異人館」に出掛け、七日頃まで滞在し、黒船に乗り込んで「蒸気
船仕掛ケ」に警嘆し、また、浜田彦蔵(アメリカ彦蔵、ジョセフ・
ヒコ)とも「長話し」をしている。定経は、興味と共に行動力もま
た並外れた大きさを持つている。

○平田鉄胤

平田篤胤の養嗣子。篤胤は既に没している。

(1) 嘉永七年六月八日

同人(弥八郎なる者) 平田鏡胤先生方へ参候^ニ付、書籍かり候
事をも咄ス、昼頃いろく持来候也

(2) 嘉永七年七月二日

七ツ前今弥八郎同道平田篤胤先生息内蔵殿方へ行、是迄虎吉^分
ハ文通いたし置候也、屋敷ハ佐竹公元鳥越中屋敷也、早速鏡胤
先生出て被参拜会、種々雑話す、又篤胤先生の得られたる所の
天の石笛を吹て見なとす、(以下略)

(3) 安政二年六月二十三日

一金壹分三朱也 春吉取賄分

骨董にも早速目を付けている。⁽¹⁸⁾

右の他に、本人その人ではなくその子弟が出てくる場合がある。

前稿で掲げた「あしの屋検校の娘と姪」がその一例である。これと同様の例を掲げておく。

(1) 「鶴峯先生之娘」(安政二年二月二十三日条) 鶴峯先生は鶴峯戊申であろう。

(2) 「岸本由津流派の国学師」 「荒川ユツルの子也」(嘉永七年五月八日条)

(3) 「式亭三馬宅葉式ふく・紅ふて三本代」(安政二年八月十日条) 宅は、三馬が経営していた葉屋のことで、三馬の子、小三馬は嘉永六年に没しているから、小三馬の後の経営になる店であろう。

本稿で述べたいことはおお右の如くである。叙述は自ずと定経に焦点が行ったのだが、定経の好奇心と追求心・行動力のスケールの大きさには改めて驚嘆させられた。

追記

一、本稿をなすに当り、前稿及び前々稿と同様、角田桜岳玄孫角田万幸様、富士宮市教育委員会各位、富士市若月正己様の御高配を戴きました。末尾ながら記して衷心より御礼申し上げます。

注 1

- (1) 「安藤野雁考・補(その六) — その著『万葉集新考』研究の基礎としての伝記 —」(成蹊国文) 四三三号 平成二二年三月
 - (2) 「安藤野雁考・補(その五) — その著『万葉集新考』研究の基礎としての伝記 —」(成蹊国文) 四二二号 平成二二年三月
 - なお、安藤野雁についての右掲以外の拙稿を左に掲げておく。
 - (3) 「安藤野雁考(一) — その著『万葉集新考』研究の基礎としての伝記 —」(論集上代文学) 第二三冊 笠間書院 昭和四七年一月刊
 - (4) 「安藤野雁考(二) — その著『万葉集新考』研究の基礎としての伝記 —」(論集上代文学) 第四冊 笠間書院 昭和四八年一月刊
 - (5) 「安藤野雁考(三) — その著『万葉集新考』研究の基礎としての伝記 —」(論集上代文学) 第五冊 笠間書院 昭和五〇年一月刊
 - (6) 「安藤野雁考(補) — その著『万葉集新考』研究の基礎としての伝記 —」(論集上代文学) 第一五冊 笠間書院 昭和六一年九月刊
 - (7) 「翻刻・安藤野雁『野雁集』(常葉本)」(成蹊国文) 二〇号 昭和六二年三月
 - (8) 「翻刻・安藤野雁『旅路の草の葉』」(成蹊大学文学部紀要) 二四号 平成元年一二月
 - (9) 「安藤野雁考・補(その二) — その著『万葉集新考』研究の基礎としての伝記 —」(論集上代文学) 第二二冊 笠間書院 平成一〇年三月刊
 - (10) 「安藤野雁考・補(その三) — その著『万葉集新考』研究の基礎としての伝記 —」(論集上代文学) 第二四冊 笠間書院 平成一三年六月刊
 - (11) 「安藤野雁考・補(その四) — その著『万葉集新考』研究の基礎としての伝記 —」(成蹊国文) 三七号 平成一六年三月
- 2 『角田桜岳日記五』(富士宮市教育委員会編 平成二二年三月)。ここには整理番号四十四から五十四までが取められている。四十四から四十七は元治二年三月から慶応二年十月までの分(欠落あり)であり、野雁は熊谷・胃山に居るので登場しない、野雁周辺の人達も見出せない。彼等が見られるのは「東行記」(整理番号四十八) 以下においてである。以下しばらく、四十八以後を採り上げていく。

- 3 「東行記」(整理番号四十八)。前稿においては、定経の出府がなかく実現していないと記したが、思いの外早く実現していることになる。
- 4 注1(4)拙稿
- 5 『和学講談所御用留六』(斎藤政雄著『和学講談所御用留』の研究)平成一〇年一月刊 国書刊行会
- 6 注1(2)拙稿において採り上げた。
- 7 (2)(3)(5)は「東行記」(整理番号五十)(4)は整理番号三十の日記(「角田桜岳日記 三」)。(3)の「山崎武陵」の個所は所収本には、「山崎民陵」と翻刻されている。原文に「山崎武陵」とあるので、これに依った。
- 8 『和学講談所御用留』の「二」及び「六」(注5参照)
- 9 「豆行記」(整理番号四十九)
- 10 注1(6)及び(8)の拙稿
- 11 成田仏教図書館(成田市新勝寺)蔵本(刊本)によると、外題は「総南詩稿」内題は「総南詩藁」とある。定経は内題の藁を藁と誤読したのであろう。『国書総目録』に「総南詩藁」とあるのも同様の誤読に基づく情報に依ったのであろうと思われる。なお、右『総目録』によると、刊年は弘化四年。所蔵は成田図書館と米本図書館(甲集)。しかし現在は、前者が成田仏教図書館(甲集のみ)、後者は現在閉館し当該書は所在不明。成田仏教図書館蔵本(甲集)には刊年は不記。恐らく逸書となっている乙集に記されていたのであろう。
- 12 『角田桜岳日記 三』所収の日記(整理番号三十)
- 13 前掲「豆行記」及び「東行記」(整理番号五十)
- 14 この記事前年の文久三年(一八六三)二月十五日条に「野雁子へ申す吾江戸へも可参事あらん、吉沢翁之伝等定メ置度」とある。春村への依頼は野雁の紹介によるのか。吉沢翁がいかなる人物かは不明。
- 15 『和歌大辞典』(昭和六一年刊 明治書院)、『国書人名辞典』(一九九五 年刊 岩波書店)など
- 16 注1(4)拙稿
- 17 「入八拾四文 馬喰町三〇屋今川柳入差引過上分」(安政二年六月十六日条)という記事もあるが、詳細不明。
- 18 他に、「野之口八留主也」(安政元年九月八日条)の野之口は、野々口

(大国)隆正か、また「 松町」遇居罷在候野元隆正」(嘉永七年五月十七日条)も同じかとも疑われるが確認できない。

(えんどう・ひろし 本学名誉教授)